

美しい山河を未来に（木曾三川治水の恩人）——デレーケ

デレーケは、美しい海と陸に囲まれた、生まれ故郷ゼーラントが大好きだった。ゼーラントは、ネーデルラント（低い土地）とも呼ばれ、低地が多いオランダの中でもとりわけ海拔の低い地方として知られていた。

オランダの国土は、四分の一が海面下にある。オランダ人は、長い水との戦いを経て、干拓（湖や海の水を除いて陸地や耕地にすること）と運河によって国土を築いてきた。

祖父がそうであったように、父も、デレーケも水との戦いに参加してきた。

デレーケは、労働者の息子なので国立工科大学には進学できなかった。しかし、向学心にあふれ、進んでリブレット先生について水理学を学んだ。アムステルダム運河組合の現場監督として働きながら学んだ日々は、デレーケの水理工師（港湾、河川土木技師）としての技術を大いに高めてくれた。

ある日、一通の手紙が来た。日本にいるドールン技師長からだった。

「日本に派遣されるのは、国立工科大学を出たエリート技師ばかりだが、君が彼らに負けない技術と情熱をもっていることは、一緒に仕事をしてきた私が一番よく知っている。日本は、今、君のような優秀な治水の技術者を求めている。

…」

その手紙は、デレーケの心に情熱の火をともした。自分を水理工師として認めてくれる人がいる。オランダ人として、美しい国土づくりに参加してきた誇りがある。今、自分を信頼してくれる上司の元で、自分の力を日本の国づくりに役立てることができる。

明治六年（一八七三年）、デレーケ三十歳のときに、妻ヨハンナ、二人の子ども、義妹エルシュと共に日本に着いた。

デレーケが最初に任された仕事は、淀川水系（淀川を中心とし、淀川を流れ

る支流・湖・沼など）の改修工事だった。

デレーケは、海からながめた山河と現地調査で見る山河の違いにショックを受けた。

山が荒れ、狭く急な川は、大雨のたびに土砂が川底をうめ、ますます洪水を起こしやすくしていた。

「エッセルさん、『治山治水』というのは本当に大切ですね。人の心が荒れ、余裕がなくなると目先のことばかり考えて木を切ってしまう。この国に住む人を責めるわけにはいかないのですが、何としてでも美しい山河をとりもどしたいですね。」

「でもねえ、デレーケ君、日本の河川工事は難しいよ。大学で学んだ知識や技術だけでは、これほど急な川の工事はできないからね。僕は、君が現場で学んだ知識と技術に期待しているからね。頑張ってオランダの技術を示してやろうじゃないか。」

明治八年、日本で最初の近代技術による砂防堰堤が淀川水系に造られた。これは、「オランダ工法」または、「デレーケ工法」とも呼ばれた。自然を破壊することなく自然を生かしてダムを造る方法である。この工事は、明治十一年から南濃町の盤若谷、羽根谷などでも行われるようになった。羽根谷巨石堰堤は、百年を過ぎた今もその役割を立派に果たしている。さらに、淀川本流改修工事によって、それまで船底がつかえて通れなかった大型の船も通れるようになった。

十年後、淀川上流の山地に施した砂防工事の結果、山々は緑となってながめも美しくなった。そして、山くずれも少なくなり、川の流れも安定していった。

こうして、デレーケの評価は高まっていった。彼は、つぎからつぎへと合理的な工法を提案し、適切に指示、指導できる技術者に成長していった。

デレーケが初めて木曾三川の視察に訪れたのは、明治十一年（一八七八）二月下旬のことだった。視察に訪れるようになったきっかけは、下流域に住む人々

の熱心な運動と、岐阜・愛知・三重の三県一体の政府への要求が認められたからである。

この地域は、濃尾平野と呼ばれており、日本でも有数の洪水地帯であった。大小二百余りの河川が網の目のように流れ、その大部分は木曾川、長良川、揖斐川に合流していた。また、水位に違いがあり、東の木曾川が最も高く、長良川、揖斐川の順にかなり低くなっていた。木曾川の流す土砂が異常に多く、その土砂が水位の低い長良川、さらに揖斐川に流れ込み洪水を起こしていた。

デレーケは、「川を治めるには、まず山を治めるべし」という信念に基づき、この調査結果を『木曾川概説』にまとめ、次のような三つの報告を政府にした。

- 一 山林の木をむやみに切らないこと
- 二 禿山の木の植えつけと栽培を行うこと
- 三 砂防工事を行うこと

このときデレーケは、木曾三川の乱流のすさまじさに気づいてはいなかった。だから、三川分流をしなくても木曾川と長良川・揖斐川の二川分流で治水できると考えていた。

明治十四年に最愛の妻を亡くしたデレーケは悲しみのあまり仕事への情熱をなくしかけていたときもあったが、木曾三川住民からの心のこもったおくやみの言葉を受け、住民の期待に必死になって応えようとして調査を再開した。この日から、デレーケと木曾三川との本当の戦いが始まった。

明治十六年（一八八三）七月に、五年連続の洪水が起きた。この事実を知ったデレーケは、今までの改修工事の考え方を土台から見直すことにした。一番大きな見直しは、二川分流から三川分流へ設計図を変更することであった。

「どうして、この設計図ではだめなのですか。これはあなたが私たちに指示して書かせたものじゃないですか。」

「なぜだめなのかというと、あの七月の洪水の恐ろしさを一番よく知っているのは君たちじゃないか。私は、イギリス人の批判も知っている。山のないオラ

ンダ人に日本の河川改修工事の設計図は書けないと。しかし、オランダで学んだ水理学と、日本の河川で体験した事実をもとに私なりの理論を築いてきた。その上で、私は設計図を書き直す必要があると判断したんだ。」

「しかし、設計図を書き直すには、もう一度現地調査をしなければなりません。それだけ改修工事に取りかかるのが遅れます。地元の人々は、あなたこそがこの木曾三川を治めてくれる人だと期待しているのです。その期待を裏切ることになります。それに、あなた自身、また批判をあびることになりますよ。」

「批判などなんでもない。私は土地の人から聞いた宝曆治水の話に感動した。しかし、その後も水との戦いにあらゆる努力をし、命と財産を守ろうとしてきたことも事実だ。これは、オランダ人も日本人もない。まして、私一人の名声など問題ではない。私の願いは、西濃地方に住む人々から木曾三川の洪水の不安を取り除き、安心して生活できるようにすることだ。そして、美しい山河の故郷をつくる。そのために設計図を書き直す。分かってくれないか。」

明治十八年十一月、木曾三川改修工事の設計図は完成した。

工事区域は、一五八・五キロにもおよぶ大工事であった。着工から二十五年後の明治四十五年には終わった。

木曾三川改修工事の最大の成果は、水害の減少である。また、水害の減少により木曾三川流域の農業も改善され、耕地が増加した。さらに、近代的治水工事の成功は、全国の河川改修工事を進める模範になった。

内容項目 四―(二)

出典 海津郡教育振興会編 「ふるさとゆかりの人々」

(平成十五年一月)